



TITLE:

(随想)雉子

AUTHOR(S):

細田, 寿郎

---

CITATION:

細田, 寿郎. (随想)雉子. 泌尿器科紀要 1962, 8(7): 395-396

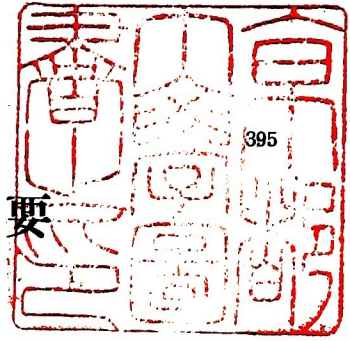
ISSUE DATE:

1962-07

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/112327>

RIGHT:



## 泌 尿 器 科 紀 要

第 8 卷 第 7 号

昭和 37 年 7 月

### 随 想

### 雉 子

大阪日生病院医長 細 田 寿 郎

先頃惜しくも此の世を去つた室生犀星の随筆「われはうたへどもやぶれかぶれ」の中で彼は尿閉に苦しんだあげく、深夜庭前の石垣の石につかまり跼みながら、一呼吸いれているとき、平常おろそかにしていた自分の睾丸にさわつてみて、ひたすら愛惜の情を抱きつつも、手のひらは鉄片か石ころを掴んだときの冷えを感じとつた。そして彼は「私はこのものはつねに冷えていてよいものではないか、寧ろ冷蔵庫入りの物だとしたら余りあたためては、却つて毒ではないかと、一人でからから笑つて見た」と書いている。

此の秀れた詩人の直観は健全なる機能を営むための本来の睾丸の環境を正當に理解しているようだ。しかし、おそらく彼は前立腺癌に悩まされていたのであろうが、そうだとすると、彼の正しかつた直観も彼の病氣にとつては聊か皮肉の感もしない訳ではない。

それにつけても、僕の生涯の師ともいふべき山廬先生も近年ようやく動脈硬化による心筋梗塞と腹部大動脈瘤に悩まされて目下臥床中である。腹部大動脈瘤は東大木本外科の和田博士の診察を受けて、この方は目下破裂の心配はないとのことだが、何分にも78才の高令だから心配だ。

山廬先生は甲府市郊外南東三里許りの甲府盆地の縁辺をなす山脈の扇状地の山間に住まれ、御宅そのものも山廬と称されている。

山廬は狐川の溪流と孟宗の大竹藪を背に、徳川時代からの旧家を誇る巨大な藁は山村を訪れる者にとつては極めて印象的である。竹林を抜け狐川を渡つて、櫟や檜の後山に登れば、盆地は一瞬のうちに眺められる。北は大菩薩峠、西は八ッ岳、茅ヶ岳、甲斐駒から鳳凰三山、白根山から更に南西へと続く甲信国境に聳える塩見岳、赤石岳と三千米級の高峰の威容は日本の屋根にふさわしい。眼下には深沢七郎の小説や木下恵介の映画で有名な笛吹川がゆるやかに盆地を貫いて流れている。

僕はある機縁で毎年の総会の余暇をみて先輩のY、H、I博士やI教授等と同道で先生を訪ねるのが茲数年来の慣はしとなつた。殊に近年先生が病床に親しむようになってからは先生は勿論、その御家族も我々の見舞いを心待ちしているように見受けられた。

こうした美しい自然に囲まれた山村の炉辺で、我々はRさんを混えて、農山村の古い習慣や風物、また我々には日頃縁遠い文学の話や、殊に芥川竜之介、若山牧水、高浜虚子、或は井伏鱒二、三好達治等の文学などについていろいろと面白い話をしてくれるのだつた。

それは昨年秋分の日だつた。その日は偶々僕は単独で先生を見舞つた。例によつて炉辺

での四方山話の末、Rさんが突然「雉子をみませんか」と僕を誘ってくれた。雉子小屋は庭前に設けられ、板葺だが二坪ほどを真新しい金網で厳重に仕切っており、一方には一番の雉と他方には一羽の雄の雉子が飼われていた。Rさんは生来野鳥を飼うのに興味を持っていたので、何日か雉子の飼育を念っていたところだつた。幸いその念願がかない、この一番の雉と相前後して一羽の雄がそれぞれ別の友人から送られてきたのだつた。この一番の雉は卵から孵されて育てられたものだから、いわば都会のインテリともいうべきだろう。殊に彼氏の翅体はその色彩も繊細で、その細頸をめぐらす白い文様など乙なネックレスを想わせ、眼の周囲には、近頃流行のアイシャドーまがいの藍青色の隈取りなどして、歩く姿など如何にも優雅だ。また食べ物からして、鶏の餌さしか食べない。他方お隣りの雄の雉子は茅ヶ岳の広漠たる山麓で生け捕られたものだつた。だから餌さも何んでもがつつ食べる上に、その翅体からすでに荒々しく野性味を帯び、頸も太く、尾翅もきつぱりとして、翼翅の色彩も文様も原色鮮かではあるが、何んとしても大味だ。しかもその元来煌々たる虎眼石に耀く筈の右眼は全く白濁していて石灰岩のようだつた。

「網で獲られるとき、棒が何かで傷ついたのでしょうか」「いわば、外傷性白内障ですね」「来年が楽しみです。雛を孵えしたらあげましょうか」「いや、家も狭いし、その上、もつとうるさい雉子を三羽飼育しているから、これ以上本物の雉子は願ひ下げですよ」二人は大笑いをして雉子小屋の前を立ち去つた。

翌朝のことだつた。僕が朝食の卓に着くと、Rさんは「大変のことになりましたよ。とうとう三角関係ですよ」と僕の顔を覗き込んだ。僕は突然のこの言葉にやや戸迷つて、すぐにその意味が飲み込めなかつた。Rさんの解説によれば、昨夜遅くなつてから、しきりに雉子の鳴き声がした。大体雉子の啼くのは春であるが、まさか、狐や鵲がねらう筈もないからと思いつつもその儘寝込んでしまつた。それでも気になつたので、朝早く起きて雉子小屋へ行つてみると、意外にも例の茅ヶ岳が、隣りのインテリ夫婦の住居に侵入しているのだつた。

「どうして茅ヶ岳が侵入したのかなあ」「岩丈な金網で仕切られているから、喰ひ破るなんてとても出来ませんよ。まあ一見して御覧なさいよ」と言はれて、僕は早速雉子小屋へ行つてみることにした。成る程、三羽が同居しているではないか。しかも金網には全然異常がない。目を落してみると、驚いたことには、一夜のうちに仕切りの地面を掘り下げて、トンネル戦法で隣家へ侵入した歴然とした証拠が残っている。

「どうです、恋の執念は」とRさんは撫然として嘆息した。昨日まで独房で呻吟していた野性の彼は一夜にして王者の貫録をみせ、しかも昨夜の格闘の痕跡すらみせず、折からの朝日に爛々としてかの虎眼石の独眼を耀かせているではないか。一方彼女はやや生気はなかつたが、それでも今晩始めて味つたてもあろう茅ヶ岳山麓の野性の本態の味を反芻しつつ、魂の故郷へ帰つた安らぎが見えるようだ。ところが衰れをとどめたのは昨日までの主人公である。一見相変らずの端麗な翅体は如何にも粋にみえているものの、かつての愛人の傍へも寄れず、片隅でただ「けんけん」と啼いている許りであつた。

山廬先生とは現俳壇の第一人者で、雑誌「雲母」の主宰者として、白雲去来する甲斐山の中で、50有余年ひたすら此の道に精進している飯田蛇笏先生の別号であることはいうまでもない